

大智度論における阿弥陀仏信仰

梶 山 雄 一

参考文献

- 一、大智度論における阿弥陀仏、阿弥陀経などへの言及
- 佐々木月樵全集一『大乘仏教教理史』、三二五―三二八ページ、一九七三年、図書刊行会。
色井秀謙『浄土念仏源流考』四〇三―四〇四ページ。一九七八年。百華苑。
藤田宏達『原始浄土思想の研究』、一九七〇年、岩波書店。
大正新修大蔵経、索引、第十三卷、一九六五年、大正新修大蔵経刊行会。
〔大智度論〕テキストは大正蔵二五卷所収本による〕

- 一 卷一、五八上。また次に菩薩の念仏三昧を修めるあり。仏かれらをしてこの三昧において増益を得せしめんと欲するためのゆえに般若波羅蜜経を説く。(仏とは阿弥陀仏に限らない。)
- 二 卷一、六三上。仏法の大海には信を能入と為し、智を能度と為す。
- 三 卷四、九三上。また次に、師子鼓音王仏の時に人寿十万歳、明王仏の時に人寿七百阿僧祇劫、阿弥陀仏の時に人寿無量阿僧祇劫なり。

四

卷七、一〇八下—一〇九上。(經)念無量仏土諸仏三昧常現在前。(論)念仏三昧はよく種々の煩惱及び先世の罪を除く。また次に念仏三昧に大福德あり、よく衆生を度す(五百人の商人が船で航海中、マカラ魚が口を開けて待ち受け、海水奔流して船が呑み込まれようとする。ある五戒を守っている仏教信者の導きで、人々が南無仏と称えると、大魚は悔い悟って口を閉じたので、人々は難を免れた、という物語を含む。仏とは三世十方諸仏)。

五 卷七、一一〇中。三人の男が三人の淫女に憧れ、昼夜専念して、ついに夢中に事に従う。バドラパーラ菩薩の教えによって、諸法はすべて念より生ず、と一切法の空をさとり、不退転を得る比喻(第二節「般舟三昧経への言及」のと同じ。ただし大論は経名をあげない)。

六 卷七、一一二下。小因にして大果、小縁にして大報あり……一たび南無仏と称え、捨香を焼けば、かならず作仏を得(仏とは阿弥陀仏にかぎらない)。

七 卷八、一一五下。仏、阿弥陀仏世界の種々の厳浄を説く。阿難言う、ただ願わくは見んと欲す。仏、ときに一切集会をしてみな無量寿仏世界の厳浄を見せしむ。

八 卷九、一二七上。(大月氏国における三つの奇跡の一つ)一比丘あり、阿弥陀仏経および摩訶般若波羅蜜を誦す。この人死せんとするとき弟子に語って言う。阿弥陀仏かの大衆とともに来る、と。即時に身を動かして自ら帰し、須臾にして命終わる。命終の後、弟子薪を積んでこれを焼く。明日、灰の中に舌の焼けざるを見る。阿弥陀仏経を誦せるがゆえに仏みずから来るを見、般若波羅蜜を誦せるがゆえに舌焼くべからざりしなり。

九 卷一〇、一三三中。(仏が成道したとき、甚深の法を愚かな衆生に説くには如何にすべきかを念じて)我まさに一法中において三分を成し、分かつて三乗と為してもつて衆生を度せん、と思惟す。十方諸仏みな光明を現じて、讚じて、善哉善哉と言う……この時、仏、十方諸仏の語声を聞いて、すなわち大いに歡喜し、称えて南無仏と言

う。是の如く、十方仏、処処に勧助して大利を為す。

一〇 卷一〇、一三四中。阿弥陀仏（安樂）世界は華穠世界に如かず。何を以ての故に。法積比丘は仏將いて十方に至り、清淨世界を觀ぜしむといえども、功德力薄くして上妙清淨世界を見うることをあたわず。（法積〓法藏。安樂世界の語はこの引用の直前にある問のなかにあらわれる。）

一一 卷二一、二二一中。（經）念仏、念法、念僧……（論）「念仏には」行得また果報得あり。行得とはこの間の国中に念仏三昧を学ぶがごとし。果報得とは無量寿仏国に人生まれば即ち自然によく念仏す。

一二 卷二九、二七六上中。第二節「般舟三昧經への言及」の七に同じ。）

一三 卷三二、三〇二中―下。一切仏の功德みな等しく多なく少なし。問うていう。もししからば何を以て、阿弥陀仏、壽命無量光明千万億由旬にして無量劫に衆生を度す、というや。答えていう。諸仏世界「のそれぞれに」淨・不淨・有雜あり……（三十三天品經に仏いう。）目蓮、まさに知るべし。かの諸仏はみなこれ我が身なり。東方恒河の砂に等しき無量世界に莊嚴せられしもの、莊嚴せられざるものあり、みなこれ我が身にして仏事をなす…

：釈迦文仏にさらに清淨世界あり、阿弥陀國の如し。阿弥陀仏にまた嚴淨と不嚴淨との世界あり。

一四 卷三四、三〇九上。阿弥陀仏世界中の諸菩薩のごときは身に常に光を出し、十万由旬を照らす。

一五 卷三四、三一一下。阿弥陀仏國のごときは菩薩僧多く、声聞僧すくなし。

一六 卷三八、三三八下。般若波羅蜜によるがゆえに念仏三昧等の諸善法を行じて諸仏に値う。

一七 卷三八、三四二上―中。問うていう。菩薩の法には衆生を度すべきなり。何を以てただ清淨無量寿仏世界の中に至るや。答えていう。菩薩に二種あり。一は慈悲心あり、多く衆生の為にするもの。二には多く諸仏の功德を集むるもの。多く諸仏の功德を集むる者は一乘清淨無量寿世界に至る。多く衆生の為にする者は仏と法と衆と

の無き処に至って三宝の音を贊嘆す。

一八 卷三八、三四三上。阿弥陀仏は先世の時、法蔵比丘となる。仏、將導してあまねく十方にいたり、清淨国を示し、淨妙の国を選択せしむ。もって〔法蔵比丘〕自ら其の国を莊嚴したるが如し。

一九 卷五〇、四一八上。世自在王仏のごときは法積比丘を將いて十方に至り、清淨世界を示す。

二〇 卷七五、五八八下―五九〇下。第五八夢行品中の菩薩二十九願の中には法蔵菩薩の誓願に類似するものが多い。また、例えば、第五二信持無三毒品中の聞我名者の願（三一三上）も法蔵の願に近い。

二一 卷七九、六一九中。法華中の説のごとし。人あり、あるいは一華をもつて、あるいは少香をもつて仏を供養し、ないし一度び南無仏と称す。是の如き人みな作仏す。

二二 卷八四、六四八中（六四六上に類文）。人あり、石泥像等を見て慈心もて念仏す。この人即ち苦を畢るに至り、その福尽きず。仏言う。また仏像を置き、もしくは恭敬心あらば仏像を見ずといえども、仏を念するゆえに華をもつて空中に散ずれば、その福によつてまた苦を畢るを得る。また散華を置きて、ただ一度び南無仏と称えれば、この人また苦を畢るに至り、その福尽きず。

二三 卷九二、七〇八下。仏土莊嚴を名づけて淨仏土となす。阿弥陀等の諸経中に説くごとし。仏答う。菩薩は初発意よりい來、自ら龜なる身口意業を淨め、また他人をして龜なる身口意業を淨めしむ。

二四 卷九三、七一二上。仏五濁惡世に出で一道において分かつて三乗と為す。問うていう。もししからは、阿弥陀仏、阿闍仏等は五濁の世に生まれず、何をもつてまた三乗あらんや。（阿弥陀仏等の世界には無常、苦、我、所有なく、二乗もない。病なければ薬を用いない。ここでは風が七宝の樹に吹き、法音を出だす。）

二五 卷九三、七一三中。法華中に説く。仏の所作の少功德なる、ないし〔仏の〕戲笑するにおいて、一度び南無仏

と称すれば漸漸に必ず作仏すべし

二、大智度論における般舟三昧経への言及

一 卷七、一一〇中。仏世にありし時の三人の伯仲たりしもの如し。ヴァイシャーリー国に淫女人アームラパーリーと名づくるもの、シュラーヴァステイーに淫女人スマナーと名づくるあり、ラージャグリハに淫女人ウトパラヴァルナーあるを聞く。三人おのおの人の三女人の端正無比を贊するを聞くことあり。昼夜専ら念じて心著して捨てず。すなわち夢中においてともに事に従うを夢む。覚めおわって心に念ず。彼女来たらず、我また往かずして淫事弁ずるを得たりと。是によつて一切諸法みな是の如きかと悟る。是において往いてバドラパーラ菩薩の所に至り、是の事を問う。バドラパーラ答えていう。諸法実にしかり、みな念より生ず、と。是の如く種々に三人のために方便して巧みに諸法の空を説く。是のとき三人即ち阿鞞跋致を得たり。是の諸菩薩もまた是の如し。諸の衆生のために種々に巧みに法を説き、諸の見・纏・煩惱を断ぜしむ。

二 卷三三、三〇六上。般舟経に説く如し。般舟三昧の力をもつてのゆえに、未だ天眼を得ずといえどもよく十方現在諸仏を見る。

三 卷四、八六下。(不退転菩薩の三種のうち)三には般舟三昧を得てよく現在諸仏を見る。このとき不退転と名づく。

四 卷七、二二一上。(大品経に十六菩薩の名を出すので、その解説。)この善守(バドラパーラ)菩薩に無量種々の功德あり。般舟三昧〔経〕中に説くがごとし。仏みずから現前してその功德を贊す。

五 卷九、一二三下―一二四上。また般舟三昧力のゆえに、天眼を得ずして十方の仏を見る。

六 卷二七、二六二上。またつぎに般舟般三昧はこれ菩薩の位。この般舟般三昧を得ればことごとく現在十方諸仏を見、諸仏より法を聞いて諸の疑網を断つ。

七 卷三〇、二七六上—中。般舟三昧中に説く如し。菩薩この三昧に入れば、阿弥陀仏を見る。すなわちその仏に、何の業の因縁の故にかの国に生じ得るやを問う。仏すなわち答えていう。善男子、つねに念仏三昧を修し、憶念して廃せざるがゆえにわが国に生ずるを得、と……菩薩摩訶薩の念仏三昧に入ることごとく諸仏を見るもまたまた是の如し。摂心をもつてのゆえに、心清淨のゆえに。譬えば人のその身を装嚴し、淨水の鏡に照らせば、ことごとく見ざるはなし、此の水鏡の中にまた形相なく、明淨をもつてのゆえにその身像を見るごとし。諸法本より以來つねにおのずから清淨なり。菩薩はよく淨心を修むるをもつて、意に随つてことごとく諸仏を見て、その疑う所を問えば、仏、問う所に答う。仏の所説を聞いて心おおいに歡喜す。三昧より起つて是の念言をなす、仏いづれの所より来るや、わが身また去らず。即時にすなわち、諸仏は從來する所なく、我もまた去る所なし、と知る。また是の念をなす。三界の所有はみな心の作る所なり。何をもつてのゆえに。心の念ずる所に随つてことごとくみな見るを得。心を以て仏を見、心を以て仏と作る。心すなわち是れ仏、心すなわち我が身。心みずからを知らず、またみずからを見ず。もし心相を取らばことごとく無知。心また虚誑にしてみな無明より出ず。是の心相に因つてすなわち諸法実相に入る、いわゆる常空なり、と。是の如く三昧と知恵とを得おわる。二行の力のゆえに意の願う所に随つて、諸仏を離れず。金翅鳥の王の二翅具足するゆえに、虚空中において所至に自在なるがごとし。菩薩も是の三昧と知恵の力を得るゆえに或は今身に意に随つて諸仏を供養し、命終わつてまたまた諸仏に値遇す。

八 卷三三、三〇六上。般舟經に説くごとし。般舟三昧力をもつてのゆえに、未だ天眼を得ずといえども、よく十

方現在諸仏を見る。

九 卷三五、三一四上。仏、般若をもって母と爲し 般舟三昧を父と爲す。三昧はただよく乱心を撰持し 智慧を

して成るを得しむるも しかも諸法実相を觀るあたわず。般若波羅蜜はよく諸法を觀じて実相を分別し 事として達せざるなく 事として成らざるなし。功德大なるがゆえに、これを名付けて母となす。

一〇 卷三七 三三五中。この菩薩あらたに道を行じて 肉身にいまだ無生法忍を得ず、いまだ般舟三昧を得ず。

一一 卷四九 四一六上 ……無生法忍、般舟三昧……

三、大智度論に現れる阿弥陀仏

1 『大智度論』(以下、大論) には、例えば曇鸞・善導・法然などに見られるような、阿弥陀仏に対するひたむ

きな信心というものはもちろん現れない。ここでは 阿弥陀仏はあくまで現在十方諸仏の一人であり たか
だが、阿闍仏と並んで、十方諸仏の代表的仏格と見做されているにすぎない。一、一〇にも見られるように、法蔵菩薩はなお功德力の十分でない菩薩であり、したがって、阿弥陀仏の安樂世界は華積世界や普華世界に劣るものと考えられている。また一、一七にいわれるように、無量寿世界は、慈悲心多い菩薩ではなくて、諸仏の功德を集める、すなわち、諸仏にならって自利行に励もうとする菩薩の行く所である。

1・2 「浄土」という言葉は中国において曇鸞によって初めて用いられるようになったものである。大論にも「清

浄世界」(一、一〇) という言い方は現れるが、「浄土」という表現は見えないようである。かりにあったとしても、それは「浄仏土」(一、二三)と同義であり、それは「仏国土を清浄にする」(Buddha-ksetra-parisodhana)の意味である。一、二三では、阿弥陀仏の国土莊嚴は一般的な菩薩の「清浄仏国土」と同じ意味に理解されている。

『大品般若経』における「浄仏国土」の有様が、『後期無量寿経』の極楽の描写と類似していることは、藤田宏達氏^⑧ (p. 512ff.) の指摘する通りであるが、大論における浄仏土も浄仏国土の概念であって、後代の浄土(浄らかな国土)の観念ではない。

1・3 念仏あるいは南無仏ということも、阿弥陀仏一人に対する信心の表現ではない。それは一般的に一人あるいは多くの仏陀への帰依の表現である。一、九においては、釈迦仏の十方諸仏への感謝さえも南無仏という言葉の方で示されている。巻七(一〇八下)で大論はいう。「念仏三昧に二種あり。一は声聞法中、一仏身において心眼も見て十方を満たす。二は菩薩道にて、無量仏土中において三世十方諸仏を念ず」。念仏とは一仏あるいは十方諸仏にたいする帰依であるが、阿弥陀仏に対する帰依のみを指すわけではない。

1・4 しかし、念仏三昧、とくに菩薩の念仏三昧はきわめて高く評価されている。一、四の中では「念仏三昧はよく種々の煩惱および先世の罪を除く。余の諸三昧はよく淫を除くも瞋を除く能わざるあり、よく瞋を除いて淫を除く能わざるあり、よく痴を除いて淫と恚を除く能わざるあり、よく三毒を除いて先世の罪を除く能わざるあり。この念仏三昧はよく種々の煩惱と種々の罪を除く」という。

1・5 それにもかかわらず、念仏三昧は般若波羅蜜に根拠づけられねばならない。一、一にいうように、念仏三昧の功徳を増大させるためには般若波羅蜜に依らねばならない。般若波羅蜜に拠ってはじめて念仏三昧を行じて諸仏に逢うことができる(一、一六)。大論が念仏三昧というときには、それは直接あるいは間接に、般舟三昧^⑨と同義であるが、二九にいわれるように、般舟三昧は乱心を撰めて知恵を生ぜしめるが、諸法実相を見せはしない。ただ般若波羅蜜だけが諸法実相に達せしめることができる。その意味で、般舟三昧は父であり、般若は母である。要するに、大論の立場では、念仏三昧という信は仏法の大海に入らしめるものであり、般若の智こそがひとを究極的に悟ら

せる(度)ものである(一、二)。大論では、無生法忍と般若三昧(二、一〇、一一)あるいは般若波羅蜜と阿弥陀仏經(一、八)とがしばしば並記されるが、基本的には、そして終極的には、般若が念仏を根拠づけている。

2 大論が念仏三昧と般若波羅蜜とを並べるのはけっして偶然ではない。実は、大論は念仏三昧の対象である現任の使命としていたと思われる。まず現在十方諸仏の証明から始めよう。これは二種類に分けられる。一つは現在十方諸仏・諸菩薩が行者の面前に実際に現れるという奇跡によって前者の存在を証明するものであり、二つは現在には仏陀は存在しないという小乘仏教の教義の批判によるものである。

2・1 大論は大月氏国における三つの奇跡を述べる(一、八。一二六下—一二七上)。(1)あるストウーパに癩風(癩風?)を病む人がいて、普賢菩薩(遍吉||普賢)の像の所にやってきて一心に帰依して菩薩の功徳を念じた。普賢菩薩は右手の大宝の光明をもって病人の身をなでた。すると彼の病は癒えた。

(2)ある所に山野に修行する比丘がいて、大乗經を読んでいた。その国王は自分の頭髮を地に敷いてその上を比丘に歩ませた。他の比丘がやってきて、王に、この比丘は老いばれであまり經も読まないのに、なんでそのような尊敬して供養なさるのですか、といった。王はいう。ある夜半、私はこの比丘に逢おうとしてその住所に行ってみた。この比丘は石窟のなかで『法華經』を読んでいたが、見ると、金色に輝く人が白象に乗って手を合わせて供養していた。自分が近付くと消えてしまった。そのことを比丘に語ると、彼はいった。それは普賢菩薩である、菩薩はみずから、『法華經』を読むひとがいるならば、自分は白象に乗って来たって、教え導こうといっている。私が『法華經』を読んでいたから、菩薩が来られたのだ、と。

(3)ある国で一人の比丘が『阿弥陀仏經』と『般若波羅蜜經』を読んでいた。彼は死のうとするときに、弟子に阿弥

陀仏とその大衆が私を迎えに来られた、といった。そして体を動かして仏に帰依し、すぐに命を終えた。弟子が薪を積んでその遺骸を焼いたが、あくる日見ると、灰のなかに舌が焼けずに残っていた。これは、彼が『阿弥陀仏経』を読んだために、阿弥陀仏が来迎し、『般若経』を誦したために舌が焼け残ったのである。⁵⁾

これらの奇跡を語ったのち大論はいう。これらはすべて今の世に現実起こったことである。經典に述べられているように、諸仏菩薩が姿を現されることは多い。此の世で煩惱の垢の薄い人が一心に念仏し、淨い信仰をもって、疑わないならば、かならず仏菩薩を見ることができると。大論のなかには上記に類似した物語の記述はきわめて多い。また、しばしば言及される念仏三昧、般舟三昧はまさしく阿弥陀仏を初めとする現在十方諸仏を面前に見るための最も有効な瞑想であった。大論はこのような奇跡また瞑想や夢のなかで諸仏諸菩薩に逢うことができるということになって、現在十方諸仏の存在を証明しようとしているのである。

2・2 小乗仏教では、一世に二仏なし、ということが一般的な教義であった。釈迦牟尼はすでに入滅したが、現在にはなお釈迦に属する時代であるから、現在には他の仏陀は存在しない、というのが彼等の主張であった。したがって、『大品経』が東方にある宝積如来の多宝世界について語り始めるとき、大論の中の問者は、ただ釈迦牟尼一仏有り、十方仏なし、と反論する。彼によれば、一仏の功德と神力は無量であって、十方世界を教化することができる。釈迦牟尼は三千大千世界はおろか、十方無量の世界をその光照によって覆い、一日のうちに虚空に満ちるほどの弟子を教化することができるのであるから、八十年の生涯のうちには十方世界の衆生を救済できた。だから、釈迦の他にいま仏陀はいないのである。あたかも二人の転輪聖王が一世に並び治めることはないように、一世に二仏はいない(巻九、一二四中—一二五上)。

仏教における仏陀觀の發展については他の機会に組織的に述べることにして、⁶⁾ここでは大論に現れる過去七仏説に

み触れておく。仏陀というものは無量億劫に一度現れるものである。現在の賢劫を中心にして見ると、賢劫のまえ九一劫のときにヴィパシン仏が現れ、賢劫の前三一劫のときシキン仏とヴィシュヴァブー仏とが現れた。この賢劫になって、四人の仏陀が相次いで現れた。クラクツチャンダ、カナカムニ、カーシユヤバ、そして最後にシャーキヤムニ仏とである。これは多くの常用經典（多持經）のなかに仏が説かれたことである。だから、もし現在、十方に諸仏がいるならば、上記七仏の劫以外の余劫に仏無く、憐れむべきことである（「除此余劫皆空無仏、甚可憐愍」）、という仏言に違ふことになる、と（一二四七）。

2・3 大論の著者は答える。釈迦牟尼に無量の功德神力があるとしても、尽きることのない衆生の全てを救うことはできない。未來世に仏陀がいなければ、なお尽きない衆生を誰が救うのであるか。だから必ず他の仏陀がいなければならない。大論はここで四依説を説明し、その後で、多くの常用經典は、方便によって、眞実でないことをも説いている。それらは未了義經であつて、了義經ではない、という。しかもこの經は、世に二仏が共に出ることはない、とはいふが、一切十方世界においても二仏がともに出ない、とはいつていない。世に二人の轉輪聖王はいない、とはいふが、一切の三千大千世界にいないとは言つていない。ただ四天下世界のなかに二人の轉輪聖王はいないというだけである。轉輪聖王は福德を行つて、清淨であり、怨敵もないから、一世界に二人現れることはない。もし、二人の王がいれば、清淨であることはできない。仏陀には嫉妬心はないが、その行業は常に清淨であるから、一世界に二仏は出ないのである。百億のスメール山と百億の太陽から成る世界を三千大千界という。これを一仏世界という。この一仏世界のなかでは釈迦牟尼仏だけが常に諸仏を化作してあらゆる仕方で衆生を救つてゐる。だから多くの經典には一時一世界に二仏はいない、というのであるが、十方に仏陀がいらないとはいつていない（一二五中）。

仏陀を見るための善根を植えない悪人のために、仏世には逢いがたいもので、ウドゥムバラの華のように、稀にし

かない、といわれたのである。小乗仏教のなかで、十方に無数の仏陀がおられる、といえば、衆生は怠って救済を求めないであろう。またかりに仏陀が世におられても、因縁のない人は仏に逢うことができない。シュラーヴァステイには九億の家があるが、ただ三億家が仏を見るだけで、三億家は仏のおられるのを聞くだけで、目には見ず、残りの三億家は聞きもしない。またあるとき仏が阿難とともにシュラーヴァステイで乞食していたとき、一人の貧しい老母がいた。阿難は仏に彼女を救ってあげるように頼んだが、仏は、この人には因縁がない、という。阿難がさらに請うので、仏が老母に近づくと、彼女は身をめぐらして背を向ける。仏が四辺より近付くと、四度とも背を向ける。仏が上から近付いても、地から出でて、老母は下を向いたり、手で目を覆ったりして、ついに仏を見なかった。因縁がないとはそういうものである。

このような種々の理由があつて、仏陀はおられないというだけのことである。十方の世界には無量の衆生が老病死という身の苦、淫瞋癡という心の苦、地獄・餓鬼・畜生に生まれるという後世の苦に悩まされている。老・病・死なくんば仏は世に出でたまわず、といわれるように、十方世界に苦悩があれば、その因縁によって仏は現れるのである（一二五下—一二五上）。

いったい、法身の仏陀は常に光明を放ち、常に教を説いているのに、衆生は罪深いために見も聞きもしない。それはちょうど日が出てても盲人は見ず、雷が轟いても聾者は聞かないようなものである。いま実に十方に仏・菩薩がおられるのに、衆生の心が不浄であるために見えないだけのことであり、衆生の心が淨ければ仏を見るのである（一二六中）。

いわば理証にあたる上記の議論をする間に、大論の著者は教証として『雜阿含經』と『別訳雜阿含經』との合糅と思われるものと、『長阿含經』の一偈とを引用して、小乗經にも現在十方諸仏の存在が認められているという。しか

し、藤田宏達氏が指摘するように、これらの小乗經典を他方仏を認めているものと解釈することは無理であるから、^⑧ここには問題としない。

2・4 ストウーパを中心にして在家の菩薩たちの集団が形成され、やがて大乘仏教が成立しようとしていた頃、菩薩たちは自分が無仏の世に生まれたことを嘆き悲しんでいた。彼等は般若波羅蜜という新しい形のさとり、一切の仏陀たちがそれによって仏陀となり、それから生み出されて仏陀となったさとり、すなわち仏母としてのさとりを求め始めた。それはまた、菩薩たちが新しい仏陀を捜し求めていたことを意味する。

『八千頌』でも『二万五千頌』でも、般若經の最後尾にはサダープラルディタ(常啼)菩薩の求道物語がある。大論はその注釈の中で、常啼(薩陀波崙。Sāṭṭhāpārāṭī)という名を種々に解釈するが、その中でいう。この菩薩は……一心に思惟籌量して仏道を勤求する時、世に仏なし。この菩薩世世に慈悲心を行ぜしも因縁少なきをもつてのゆえに無仏の世に生まる。彼は空閑林の中で大精進しているときに、彼の般若波羅蜜を追求するさまを励ます教えの声を空中に聞くが、その声は久しからずして滅してしまふ。常啼は声の指示を十分に理解しなかつたので、我れ如何にして問わざりし、と悔いる。そういうわけで憂愁啼哭すること七日七夜であつた。そこで天龍鬼神は彼を名付けて常啼と云つた、と。

空中の声とはもとより現在十方の諸仏・諸菩薩である。この後サダープラルディタは三昧において無数の諸仏を見るに至り、その諸仏の教えに従つて東に法上(曇無竭 Dharmodgata)菩薩を尋ねていつて、ついに般若波羅蜜の教えを聞くことになる。この物語に現れる常啼は大乘仏教發生の直前において、無仏の世を嘆き、悲しんでいた菩薩たちの典型であつた。

3 現在十方諸仏の存在とともに大論が『般舟三昧經』を引いて証明に努めていることは空の真理である。大論は卷

七、一〇中に『般舟三昧經』(Tib. 3D) に出る著名な物語を引用する。釈迦仏在世中に三人の兄弟がいて、それぞれヴァイシャーリーにいる淫女アームラパーリー、シュラーヴァステイーの淫女スマナー、ラージジャグリハの淫女ウトパラヴァルナーのことを聞く。三人は人々がこの三人の女の端正無比を賛えるのを聞いただけで恋に落ち、昼夜こころに念じてやむことがなかった。やがて夢のなかで事を行った。覚めてから考えた。かの女が来たわけでもなく、自分が行ったわけでもないのに、淫事を行うことができた、と。そして三人の男は一切諸法もこれと同じである、と悟った。そこで三人はバドラパーラ菩薩の所へ行つて、このことを質問した。バドラパーラは答えていう。そのようにあらゆる事物は心から生じる、と。そして三人のために種々に方便して巧みに諸法の空性を説いて聞かせた。その時に三人は不退転を得た(二、一参照)。

3・1 周知のように、ヴァスバンドゥは『唯識二十論』第四偈 a b において外界の対象の実在性を否定して唯識の理論をうち樹てるために、同じ夢中における淫事と夢精を比喻として用いている。また後代の仏教認識論において、恋人のことを絶えず、長時にわたつて、思いつめていると、やがてその恋人の姿がありありと見えてくる、という比喻が、瑜伽行者の直観(yogī-jāna)を確実な認識として証明するために用いられている。夢中の淫事という比喻によって諸法は念より生じることを証明しようとする「般舟三昧經」とそれを引用する大論とは、大乘仏教における空の理論の一形態である唯識無境説の先縦をなしているのである。

3・2 二、七にあげたものも『般舟三昧經』の有名な個所の引用である。しかしここで注意したいのは、般舟三昧をめぐる『般舟三昧經』および大論の解釈である。菩薩は清浄な心によって般舟三昧を行じて阿弥陀仏を見る。そして仏に疑問を提出すると、仏はそれに答える。三昧より起つてからこう考える。仏はいったい何処から来られたのか、どこから来られたのでもない。自分もまた何処かへ行つたわけでもないのに見仏の事実が起つた。

三界のあらゆるものはみな心によって作られるにすぎない。というのは心の念ずる所に従ってみな見えてくるからである。心をもって仏を見、心をもって仏と作る。心が仏に他ならず、心がわが身に他ならない、ときとる。(この文章が『観無量寿經』に引き継がれていることもよく知られている。)しかも心はそれ自身を知りもしないし、見もしない。心に形象(心相)があるとするれば、それは真実の心ではない。心はまた虚妄であって、無明に基づいて起る。このような心の虚妄性を知ることによって諸法の実相、即ちそれらが常に空であることを知る。

3・3 この議論を読んでいるとわれわれは自然に『中辺分別論』一、三を思い出す。すなわち、「認識が生起するとき、それは対境として、有情として、自我として、および表識として(四通りに)顕現する。しかし、その(四通りの)対象は実在しない。それが存在しないからかれ(すなわち認識、心)もまた存在しない」。また、心はそれ自身を見も、知りもしない、という議論の仕方は、『中論』三、二「かを見るものはそれ自身をけつして見ない。それ自身を見ないものがどうしてそれより他なるものを見ようか」に似ている。『中論』のこの個所では、見るものは眼を意味する。『般舟經』および大論ではその眼を心に変えて議論しているだけである。

3・4 『般舟經』も大論も、ひとが身を飾って、鏡、麻油、清浄な水などに自らを照らして見る、という喩えをあげて、そのとき自分の影像は鏡の中より出たわけでもなく、外から入ったわけでもない、という。要するに、人と鏡と光などの多くの原因・条件によって影像が生じただけである。そして、多くの因縁によって生じるものは実体の空なるものである、といって空を論証している。『般舟經』と大論は、ここで、般舟三昧による見仏という実験によって空性を証明しているわけである。

3・5 大論は結論する。たとえば金翅鳥の王が、二枚の羽が備わっているために虚空を自在に飛行するように、菩薩も諸仏を見る三昧と空の智慧との二行の力によって今世に仏を供養し、命おわってまた諸仏に逢うことが

じあるのだ」と。

注

- ① Y. Kajiyama, *Studies in Buddhist Philosophy*, Rinsen Book Co., 1989, Transfer of Merits in Pure Land Buddhism, p. 136 sq.
 - ② 藤田、前掲書、五一二ページ以下。「大品般若經(大正、八、四〇八中—四〇九下)の淨仏国土の文を注して、大論は「阿弥陀等の諸經の中に説くが如し」という。
 - ③ 般若三昧、また般若般三昧(二六参照) pratyutpanna-buddha-saṃmukha-avasthita-samādhi を略した pratyutpanna-samādhi あるはその俗語形 paccupanna-s. の音写。支婁迦讖訳は現在(諸) 仏悉在前立三昧。この三昧は中国・日本の伝統的解釈では「菩薩の) 面前に現在諸仏の立てる三昧」の意味であるが、チベット訳などの經文によれば「現在諸仏の面前に立てる(菩薩の) 三昧」の意味になる。天台(智顛)・淨土教などでは pratyutpanna を「立ち上がった」の意味にとり、また「經行して休息するを得ず、坐し得ること三月、その飯食左右を除く」(般若三昧經) 四事品第三) の經文によって「仏立」三昧と解し、「常行」三昧と解している。Paul Harrison, *The Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra, An annotated English translation of the Tibetan Version with several appendices*, 1979, p.2-4, n.1.
 - ④ 阿弥陀仏經は小經たる「阿弥陀經」ではなく、むしろ無量壽經の二形態であると思われる。藤田、前掲書、一〇五ページおよび注一五参照。
 - ⑤ Etienne Lamotte, *Les sources scripturaires de l'Upadésa et leurs valeurs respectives*, Cahiers d'Extrême-Asie, 2, Kyoto, 1986, p. 8-9. 加藤純章訳「大智度論の引用文献とその価値」『仏教学』第五号、山喜房、一九七八、一四ページ。
 - ⑥ 吹田隆道、「大本經類」に見る過去仏思想と二つの展開」、『仏教大学・仏教文化研究所報』第八号、一九九〇年参照。
 - ⑦ 藤田、前掲書三六一—三六四ページに詳しい論評がある。
 - ⑧ P. Harrison 前掲書の分節による。
- 本稿脱稿後、幡谷明『曇鸞教学の研究—親鸞教学の思想的基盤—』、同朋舎出版、一九八九、一三七頁以下に「大智度論」に見られる淨土教思想の資料集成的あることを知ったが、利用できなかった。